

脅威との共生 ～適応へのサステナビリティ マネジメント

JICQA
代表取締役社長
菅野 良一



新型コロナウイルスによるパンデミックが始まって2年半以上が経ちました。人類の英知を結集したワクチンが驚異的な速さで開発され、複数回の接種により人類が勝利したかに見えました。しかし幾度となく繰り返される感染拡大を前に、環境の変化に応じてランダムな変異を繰り返すというウイルスの生存戦略に底知れぬ怖さを感じています。「生き残る種とは最も強いものではない。変化に最もよく適応したものである」という「ダーウィンの種の起源」の理論を、人類はこの3年足らずの間で体感していることとなります。

パンデミックが始まった頃に山本太郎著『感染症と文明——共生への道』（岩波書店、2011年）を手に入れました。東日本大震災の年に上梓された本です。同書では、文明が発展する以前の狩猟時代から、炭疽症、ボツリヌス症、マラリア、ペスト、チフス、天然痘、インフルエンザなどが繰り返し人類に脅威を与えてきたこと、そしてこれらの感染症は、人口の増加、移動範囲の拡大、野生動物の家畜化といった人類の活動から広がっていることが解説されています。感染症による人口の度重なる激減を経て、人類は自ら抗体を獲得し、またワクチンにより打ち勝ったように見えますが、実際はウイルスや病原菌とのうまいバランスの中で人類が生き延びている、すなわち「感染症と共生」しているのが実状のようです。

気候変動が人類の活動に起因していることが科学的に証明され、その緩和に向けたカーボンニュートラルの動きが加速しています。人類の祖先は700～600万年前に生まれ、現在の新人類が30～20万年前に出現しました。約1万年前には農耕技術が発達しましたが、人類の発展を加速したのが18世紀末の産業革命です。Syvitskiらの論文*によれば、エネルギー消費量や人口などが産業革命以降に増えていること、特に1950年代からは激増している実態が示されています。結果として大気中の

* Syvitski, Jaia et al. (2020). "Extraordinary human energy consumption and resultant geological impacts beginning around 1950 CE initiated the proposed Anthropocene Epoch," *Communications Earth & Environment* 1:32.

CO₂濃度が急速に増え、温暖化が進みました。人類は過去何十万年もの間、太陽エネルギーの恩恵による地表面の植物や動物を糧としてきましたが、産業革命以降に地中に眠っていた化石燃料に手を付けたことが気候変動の根本原因とされています。何億年もの年月をかけて地球内部に蓄積された物質を2~3百年、とりわけ直近の数十年で一挙に消費し続けた人類の活動の結果が気候変動です。感染症と同様に気候変動も大きな脅威であり、人類は今まさに地球レベルとなる危機対応を迫られています。

では、気候変動の問題に対して人類はどのように対応すれば良いのでしょうか。この問題は地球の自然状態を人為的に、しかも急激に変えたことに起因しており、短期間での解決・解消は極めて難しいと言わざるを得ません。現状をより悪くせず、少しずつでも改善させる「共生」の道しか方法がないと考えるべきです。技術革新により大きな不便を感じることなく共生できる可能性もゼロではありません。しかしこれまで当たり前と思っていたものが使えなくなるなど、不便を我慢することが求められる可能性の方が大きいと考えられます。

感染症にせよ、気候変動にせよ、いかにして脅威との共生を探るかが課題です。これをISOマネジメントシステム規格の視点で見ると、まず内部・外部課題、ニーズ・期待及びリスク・機会を的確かつタイムリーに評価し、そしてそれに対応するため施策を計画・実行・検証・改善するというプロセス、すなわちPDCAプロセスを早回ししながら、脅威への適応に向けた自己（組織）変革を行うことが基本となります。普遍的な課題解決のツールであるISOマネジメントシステム規格により審査を行う認証機関として、JICQAは日々問題・課題に対峙する組織を支援し、社会に貢献して参ります。

[目次に戻る](#)